

### 3. 民俗学の方法

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

Facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

#### \* 民俗学（みんぞくがく）

「(folklore folklore・Volkskunde ドイツ) 一つの民族（主として自民族）の伝統的な生活文化・伝承文化を研究対象とし、文献以外の伝承を有力な手がかりとする学問。わが国では柳田国男・折口信夫等の主導によって独自の発展をとげた」（『広辞苑』）

\* 目的：「何ゆえに農民は貧なりや」（1935『郷土生活の研究法』刀江書院）「経世済民」「学問救世」

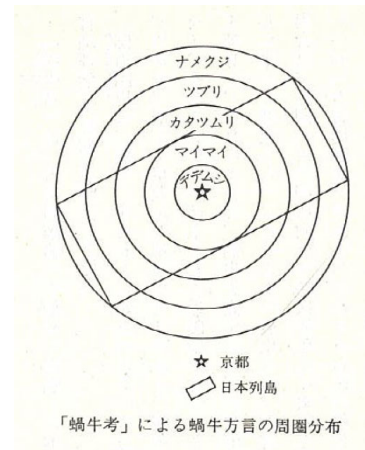
\* 対象：民俗資料（民間伝承）←→文献資料

「愛すべき我邦の農民の歴史を、たゞ一揆嗷訴と風水虫害等の連続の如くしてしまつたのは、遠慮なく言ふならば記録文書主義の罪である」（1944『国史と民俗学』六人社）

\* 方法1：比較（周圏論・重出立証法）

「もし日本が、このような細長い島でなかったら、方言は大凡近畿地方をぶんまわしの中心として、だんだんに幾つかの圏を描いたことであろう」

（1930『蝸牛考』刀江書院）



\* 方法2：採集

<民俗資料三部分類>

	伝承形態	採集感覚	採集主体
有形文化	体碑	眼	旅人
言語芸術	口碑	耳	寄寓者
心意現象	心碑	心	郷土人

有形文化：住居、衣服、食制、漁業、林業・狩、農業、交通・交易、贈与・社交、労働、村構成、家族、婚姻、誕生、葬制、年中行事、神祭、舞・踊・競技、童戯・童詞

言語芸術：命名、詞、諺・謎、民謡、語り物、昔話、伝説

心意現象：妖怪・幽霊、兆・占・禁・呪、医療

（柳田国男・関敬吾 1942『日本民俗学入門』改造社）

\* まとめ：民俗学とは、民俗資料の採集と比較を通して常民の歴史と現在を解き明かす学問（「内省の学」）

状態にある。我々は地域の空白を埋めるように採集者が気をつけてくれることを願っている。地域やあるいは問題で採集を分業化することができれば、この学問採集のために喜ばしい。学校で生徒を使って採集せしめることには、もとよりと考えるよりよい方法のようだが、少しずつ違つたものが数多く集まるだけではない、よりきつくりの成績しか挙げられないのは、方言・民謡の採集の例によつても明らかである。要するに疑問の成長を目標にし、適切な疑問を成長させるために、わかりきつたことの報告の重複を避けることである。そのためには何よりも資料の分類整理ということが必要である。資料を現在のごとく乱雑に放置しては、この学問はいつまでも進歩しないであろう。

## 二 三分分類

自分はこの乱雑な資料を整理し、必要に応じて差入れのできるような分類法を企て、三年ほど前に一応それを公表した。これによつて志ある者の労力を無駄にせず、地方にあつても必要な採集ができるようにすることが、自分の分類に対する念願であつた。また既往の採集がどこまで進んでいるか、今後はどの方面の採集が必要であるかを明らかにしたかったのである。社会事象の変遷して来た事實は、そうして集めた資料の分類によらなくては明らかでない。甲から乙への変化事實は、実際そう手堅にはわからないからである。社会事象を幾つか集めて、それを比較するとその事象の変化過程は割合によくわかる。比較は万遍なくと

この隅にも観察の目が届くようにすることが肝要である。この比較に便せんために、自分は分類の必要を叫んだのであつた。もとより自分の知識には至らぬ限もあつて、不備はまぬがれないであろうが、この分類はでき上つたものの整理というより、今後目的を持って採集する人達を適宜に働かせるために作られたものであるから、不完全は忍ぶべきだと自ら考へて

いる。

既往の分類も少なくはない。折口氏のごとく独特の分類を持つてゐる人もあるくらいである。自分はごく自然な順序に従つて案を立ててみた。すなわちまず目に映する資料を第一部とし、耳に聞える言語資料を第二部に置き、最も微妙な心意感覚に訴へて始めて理解できるものを第三部に入れるのである。目は採訪の最初から働き、遠くからも活動し得る。村落・住家・衣服、その他我々の研究資料で目によつて採集せられるものはなほ多い。目の次に働くのは耳であるが、これを働かせるには、近よつて行く必要がある。心意の問題はこの両者に比してなお面倒である。自分は第一部を洒落て旅人学と呼んでもよいといつてゐる。通りすがりの旅人でも採集できる部門だからである。これに依りて第二部を寄寓者の学、第三部を同郷人の学ともいう。また第二部が口碑という語に当るところから第一部を体碑、第三部を心碑と呼んでもよいと思う。かく種々の名辭を附することができ、各部をそれぞれその内容から考察することは必要なことである。第一部は、目に映し、生活に現われる点から、有形文化とも生活技術語彙ともいふ生活諸相ともいふ得る。英語の social technology をこの部の名とする、少なくとも一方に偏するようには思へないが、Ethnography と

近い内容だともいえる一般習俗が第一部門の内容である。第二部は言語系語彙あるいは口承文藝のすべてを網羅する。これは目の学問と違ひ、土地にある程度まで滞在して、その土地の言語に通じなければ理解できない部門である。この部門は疑問の百出があり、自然次の部門との関聯が必要となつて来る。第三部にはいづゆる俗信なども含まれており、これは同郷人・同国人でなければ理解のできぬ部分で、自分が郷土研究の意義の根本にここにあると

思つてゐると思つた。

かく自分だけの分類を立てて外国の分類がどうであるかと改めてみると、同じ気持ちからするゆえか、おおよその分類と似た三部に分類がしてある。おそろしく自然な氣附きやすい分類なのだろう。英国のバーン女史 Miss C. Burne の『フォークロア提要』第二版の分類を見ると、第一部が信仰と行事 Belief and Practice、第二部が慣習 Customs、第三部が説話・民謡等 Stories, Songs, and Sayings となつてゐる。すなわち自分の案とは順序が變つており境目に喰ひ違ひはあるが、三分分類の根柢は同じだといふことが証明せられる。フランスのセビオ P. Sebillot は『レ・ノックロール』を口承文藝 Litterature orale と伝承士俗誌 Ethnographie traditionnelle の二部に分つてゐるが、第二部をまた伝承士俗誌と士俗誌的社會学 Sociologie ethnographique の二つに分け、前者を非類(天・地・水・植物)と生類(動物・人・生・幼・婦・病・死)に分ち、後者には耕作・漁撈・料理・建築及び工芸・人と人との關係・娯樂等を入れてゐる。しかしその區別は明らかでない。これを仔細に見ると、伝承士俗は觀念・心持を含んで自分の第三部に該当し、士俗誌的社會学は外形にあらわれるもので、自分の一部分類に相当してゐる。しかしこの分類は論理的出發点を持つてゐない。また宗教がどこにも入つておらぬことに注意する必要がある。

自分のこの三分分類の案が突拍子もないものではないことは承認されたい。もとより目・耳・心の三部に分けることは自分独自の意見ではあるが、三部ならざるべからずということだけは言ひ得るところと信ずる。この分類は量において三部各平等でない。第一門は非常に範圍広く従つて分量も大きく、我々の採集しようとするものの大半はこの部に属してゐる。第三門の心意諸現象は採集のしがたいだけに、採集量も第三門のうち最も小である。従つてこの三分分類は三重の餅のごとく最下部の第一部門から第二部門、第三部門と順次小さく

なつてゐる。こういう分類はいくらか変に見えぬが、分類をする以上、分量より内的標準による方が至当だから仕方がない。なおこれをわかりやすく表示すれば次のごとくなるのである。

